

# 日本語社会における女性の言語形式選択に 関する言語意識

— 痴漢被害場面を事例として —

豊田 雅

## 1. 研究背景と目的

日本では痴漢に対してでも女性が「やめろ」、「触るな」などの命令形や禁止形ではなく、「やめてください」という言語形式を選択する（牟田、2018：36など）傾向にあることから、「怒りや拒絶の言葉が女性から奪われている」（牟田、2001：127）ことが指摘されてきた。しかし、言語形式選択の表層と深層は必ずしも一致せず（金子、2002：192）、その深層を捉えるためには、話し手にその言語意識を尋ね、質的に分析する必要がある。

そこで本研究では、痴漢被害場面を事例に、日本語を母語とする女性の言語形式選択に関する言語意識を調査し、「やめろ」が選択されない傾向にあるのであれば、そこにはどのような言語意識が存在するのかを考察した。

## 2. 研究方法

本言語意識調査は2022年8月から日本語を母語とする女子大学生及び大学院生40名を対象に1名ずつ実施し、所要時間はそれぞれ40分から1時間程度だった。調査はまず①場面想定法を用い、「痴漢被害場面で自分なら何と言うか」と尋ね、その際、②評価尺度法を用い怒りの程度も確認した。そして③半構造化インタビューにより①、②の理由や、「車内で隣の人が『やめろ』と声を上げた場合、どう思うか」などの言語形式に対する評価といった言語意識に関するデータを収集し、テーマ分析を行った。

### 3. 結果と考察

調査の結果、「痴漢被害場面で何と言うと思うか」については、大きく『やめてください』と言うと思う」と「何も言わないと思う」の2タイプに分かれた。そして、何か言うと思う場合に限れば、「やめてください」が7割程度を占め、『やめろ』などの命令形や禁止形を用いると思う」と答えた人は一人もいなかった。したがって、痴漢被害場面でも『やめろ』ではなく『やめてください』という言語形式が選択されるという牟田（2018：36）などの指摘は妥当であることが推察された。

そして、『やめろ』とは言わないと思う」という言語意識についてテーマ分析を行った結果、「志向意識」というテーマには、【毅然と言いたい】、【周囲に自身の正当性をアピールしたい】、【ヒステリックでない自分でありたい】、【汚い言葉を使わない自分でありたい】の4つのサブカテゴリーが生成された。それぞれの語りの代表例をまとめると、痴漢に対する怒りの程度は100%であっても、その気持ちを抑えなければ「冷静に判断できなくなる上、言葉が詰まったり早口になったりもする」、また「相手になめられ、隙を見せることになる」ため望ましくないと考えていた。また、乱暴な言語形式を用いたりすると周囲にも「間違っただけを言っているように見える」ため、怒りを表出したくないと考えていることがわかった。これは因（2006：63）の、女性は怒り表出を行う場合でもトーン・ポリシングを避けるために戦略的に冷静さや品位を示そうとすることがあるという指摘と一致している。

また、そもそも「汚い言葉を使う人、ヒステリックな人が好きじゃない」ため、「やめろ」と声を上げることは、ありたい自分ではないと考える傾向も明らかになった。

Goffman（1967）は、敬意表現と品行とを区別し、品行を「その場にいる人たちに対して、自分がまわりから見て望ましい性質を持っている人間であること」（浅野訳、2018：77）を表すものであるとしたが、本研究でも、自身の「品行」を周囲に示したいという言語意識から、「やめろ」ではなく、「やめてください」という言語形式が選択される傾向が窺えた。

#### 4. 結論と今後の課題

本研究では、痴漢被害場面で女性に「やめろ」といった命令形や禁止形の言語形式が選択されない傾向にあることをその言語意識に焦点を当て分析し、選択できないというよりは、したくないという言語意識を持つ傾向にあることが明らかになり、「怒りや拒絶の言葉が女性から奪われている」（牟田、2001：127）といった解釈には再考の余地があることが示唆された。

今後の課題としては、調査対象を女子学生以外の世代や男性、また日本語学習者にも広げることで、より日本語社会における女性の言語形式選択に関する言語意識の特徴が明らかにできると考えている。

#### 【引用文献】

- 金子栄子（2002）「オーストラリア人と日本人の接触場面での依頼に対する応答——フォローアップ・インタビューの一例——」ネウストブニー, J, V・宮崎里司編『言語研究の方法——言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために——』くろしお出版。
- 因京子（2006）「談話ストラテジーとしてのジェンダー標示形式」『日本語とジェンダー』ひつじ書房, 53-72.
- 牟田和恵（2001）『実践するフェミニズム』岩波書店。
- 牟田和恵（2018）『ここからセクハラ！——アウトがわからない男、もう我慢しない女——』集英社。
- Erving Goffman（1967）*Interaction ritual, Essays on face-to-face Behavior*, Pantheon Books, New York.（浅野敏夫訳（2018）『儀礼としての相互行為——対面行動の社会学——〈新訳版〉』法政大学出版局。）

（とよた さやか・お茶の水女子大学大学院博士前期課程）